

そんな日も、いつかは来るんだろう。それがいつなのかはわからないし、今は考えられないけれど。

「そんなの、認めない」

「は？」

なぜ、認める認めないの話になるのか。全く理解できない。

「俺以外って、誰だよ。俺のこと好きな癖に、そんな簡単に諦めて誰かに足開いて、いやらしいこと強請るなんてそんなの絶対許さない」

「いや、あの、臨也さん？」

（何だよ足開くって！）

つまりどうしても相手は男限定ということか。しかもいやらしいことを強請るって、自ら強請ったわけではなくて臨也が言えと強制した癖に。

（そりや少しは僕から強請ったこともあったかもしれないけど！）

もつととか中出ししてとか、そんなことも言ったかもしれないが、それはともかく。

（何でこの人、切れてんだろう？）

どう見ても、今の臨也は尋常じゃない。いつもの彼ではなかった。怒っていて、切れている。

「君は俺のдаро。俺の駒で、俺が初めての恋人なんだから！」

「いやあの、でも臨也さんもう飽きたんですよね？」

「けど帝人君は俺が好きだろ」

いかにも当然、とばかりに言う。それが真実なのがつくづく嫌になる。

「はあ。その、……好き、ですけど。でももう終わりでしたから」

「好きなら縫えば良いと思わない？ 捨てないでとか別れたくないとか何でもするとか、言うことあるだろ」

すらすらと出てくる言葉に、きつと言われ慣れているんだろいうな、と冷静に検分する自分がいた。そうして、きつと臨也はそうやって縫られても、平気で捨てて来たのだから。

「臨也さん、今までそう言われて思い直したことってありますか？」

「ないよ」

「……」

あつさりと得られた予想通りの返答に、この人は本当に人でなしでロクデナシだ、と思った。

「けど、君に言われたら条件次第じゃ領いてあげる気だった」

ものすごく上から目線の言葉だが、臨也なので仕方ない、という気になる。聞くべきではないと思いつつも、ついっいい好奇心に負けた。

「条件？」

「俺と同棲して、シズちゃんと絶縁して他の奴らとも距離を置いて俺だけ見てくれるって約束するなら、考え直してあげる気だった」